『ほるとがる文』

わたくしは、『ほるとがる文』の主人公マリアンナの面影を、もう一度見ようと人込みをわけていった。狭い路地のような部屋の両側にはガラス戸のついた陳列棚があり、そのつきあたりが、細長い窓であった。陳列棚の中には、アンリ・マチス描くところの挿絵が八種類、それぞれの代表的なページをひらいて、出陳されてあった。その一つに、一九四六年巴里テリアード版の『ほるとがる文』の尼僧マリアンナの石版画があった。横顔の左半分から頸にかけて数本の線で描かれた頭巾で包まれ、おでこの額から高い鼻に至る稜線の鞍部の奥に目があった。鼻から上唇・下唇・顎への幾曲りの線の果ては、後頭部から喉にかけて包まれた頭巾の線の下端と自然につらなっていた。見ひらかれたその目は、激しい情炎にかがやき、やや綻びた唇は、女人の運命の悲哀をふくんでいた。あの目を、あの口を、わたくしはもう一度見たいと思った。狂気のように群衆を押しわけて引き返した。

路地のようなあの部屋は、学生たちが騒々しく行き来していた。ガラス戸の中のものには、ほとんど無関心のような表情でその前を行ったり来たりしていた。梅雨空がガラス戸に反映していた。あの中の、あの個所にあるのだと、心はあせりながら、路地から流れ出てくる群衆の力に押されて、一歩も部屋に入ることができなかった。わたくしは、背のびをして、それをもとめた。学生帽の交錯のすき間から、ちらとそれを見た。その目は、梅雨空の方を見ていた。情炎に一きわ光ったように思った。

昭和十七年から八年にかけてのころであった。わたくしと、わたくしの友とは、縁あって小石川関口町の、蔦のからまったベンガラ塗りの塀や門のある佐藤春夫先生の宅に、頻繁に出入りしていた。そして暇さえあれば古本屋をあさって、友と競争するように、佐藤先生のものを買い集めた。その一冊に『ほるとがる文』がある。渋谷宮益坂の大化書房で当時すでに稀覯本となっていたそれを探し当てた日、持ち帰って友に示したら、彼は大仰に「やられた」といった。それも今はなき友であるだけに、一層なつかしい思い出となった。あの戦時下、学徒出陣の若き教え子たちを、感動の涙をもって送った心で、いくたび、この本をむさぼり読んだことだろう。フランスの軍人シャミリー侯爵にささげられた、ほるとがるのコンセプション修道院の尼僧マリアンナの哀切極まりない恋、そういう恋を、あのきびしい時局の空の下で、思いつづけたということを、わたくしは、不思議の国をのぞくような気持で、今も想い返している。胸に一ぱいたたえられた

熱いものが、何かの拍子に、表面張力が破れてすごい勢いで溢れ出そうな、そんな明け暮れであった。わたくしは、そのような明け暮れを、わが王朝女人の哀歌や、ほるとがる尼僧の恋文への執心にゆだねていたようである。

こんど、マチスの偉業が、はるばる海彼のフランスから渡ってきて、じかにそれに接することができたのは、まことに「命なりけり」の感が深い。東京会場にも大阪会場にも行けなかったわたくしは、ただ新聞・雑誌などで、感銘深い感想文をよむことによって、せめてもの心やりとしていた。しかし近くの倉敷市まで、それが持って来られたことを知って、何をおいてもと出かけて行ったのであった。美術雑誌の紹介に出ていた「ほるとがる尼僧の恋文」の挿絵に心ひかれて行ったのだと言われても、わたくしには弁解の余地のないほど、わたくしの、マチス展へのひたぶるな傾情の中に、『ほるとがる文』の影響がはっきりした位置を占めていたことは、ここに告白してもよい。

（二六・七）